

図書紹介

サンタクロース

—異教のまればと—

Biographies du Père Noël
par Catherine Lepagnol
Paris: Hachette 1979

年の瀬を、ひときわ賑わすクリスマス習慣は、いつ頃日本へ入ってきたのであるうか。店先にあふれる赤い長靴と、デコレーションケーキ、たえないジングルベルのメロディーは、日没の早い町を華やかに盛りたて

る。キリスト教とは縁の薄い日本で、何故このように盛大にクリスマスが祝われるのであろうか。折口信夫は、そこに古風な生活の誘惑を見ている。(古代生活の研究)「^{しきた}為来り」は家庭生活を優雅にし、しなやかな力を与え、と言うのである。確かに、クリスマスは家族の輪の中でおこなわれる祝いである。贈り物を交したり、特製のケーキを分け合って食べることで、ファンタジックな世界を共有できる。しかし、これは非常に奇妙な現象である。日本に根のない異教の習慣が、すんなり定着している、しかも、一週間後に正月という、日本では最大の年中行事を控えている時期にである。コマーションリズムの影響はもちろんのことながら、それだけではない何か、クリスマスの祝いにはあるのではないか。

そんな疑問を解き明かしてくれるのが、この『サンタクロース——異教のまればと——』である。著者のキャトリーヌ・ルパニヨルは、心理学や児童文学にも精通した女性の民俗研究家で、本書では、サンタクロース信仰やクリスマスの本質を、様々な角度から考察している。

著者がまず試みたのは、サンタークロス伝承の起源を、豊富な民俗資料をもとに、古代からたんねんに掘り起こしていくことである。その作業で明らかになるのは、小アジアに発した聖ニコラスという聖者の信仰が、交易や十字軍の遠征によってヨーロッパにもたらされ、土着の信仰と習合して新たな展開を見せたあと、移民たちによってアメリカへ運ばれ、固定したイメージ、すなわち赤い服に白ひげのサンタクロースを生むに到るプロセスである。著者は、聖者信仰の変節の跡を辿りながら、同時に、クリスマスにまつわる様々な習俗も集大成して、民間信仰の実相を浮かび上がらせている。さらに一歩踏み込んで、サンタクロースの象徴的機能を分析し、このまればとが、現代社会に投げかける波紋についても、論を進めている。

クリスマス——死者の復権——

クリスマスは、キリスト教文化圏では、イエスの生誕を祝う日である。しかし、初期のキリスト教にクリスマ

スの祭りはなく、福音書にも、イエス・キリストの誕生日は明示されていない。著者は、クリスマスの語源や古代信仰との関連を問うなかで、この時期が、死者の世界と密接に結びついていることに着目する。全ての生産活動が停止し、大地が眠りにつく冬は、農耕生活者にとって、最も不安な季節である。自然の脅威が人間を圧倒し、人間の力は限りなく弱められる。人々が何より求めたのは、春の再来を約束するものであった。その表象が、クリスマス・ツリーである。常緑の樅の木は、四季のリズムを超越した、不死のシンボルである。もともとは、赤いリングをたっぷりつけられ、「生命の木」、「楽園の木」などと呼ばれたが、十八世紀頃から、ろうそくが飾られ、お菓子やおもちゃも吊り下げられるようになった。樅の木の力は、陽光に代るろうそくの光に増幅され、人々の懸念を追い払うのである。

木の生命力への信仰は、「丸太燃やし」にもみられる。豊作と長寿を願って、果実のなる木をイヴの夜に暖炉にくべるのである。できるだけ長く燃え続けるようにと、

丸太は数メートルの長さに及ぶこともあった。燃え残った灰は、一年中大切にとっておかれ、浄めに使われた。この習俗は、「丸太型ケーキ」に形を変えて、今も変わらず生き続けている。丸太型のケーキを食べることで、木の生命力を、内に取り込んでしまおうというのである。

一方、人々は死の世界と協調することも考える。十一月一日の万聖節には、キリスト教の殉教者たちを祭り、その翌日には祖先の墓参りをして、死者たちの魂を家へ迎え入れる。彼らに魂を奪われぬようにと、人々は多くのタブーをその身に課しつつ、クリスマスまでの長い期間を、ひたすら死者を祭り上げて過すのである。

サンタクロースの実像

サンタクロースのもとになったのは、聖ニコラスである。聖ニコラスは、三世紀に小アジアに生まれたキリスト教の司祭で、異教放逐のために尽力し、その霊能は多くの伝説に語り伝えられている。聖ニコラス信仰は、商

人や十字軍によってヨーロッパにもたらされ、ライン河沿いに広まっていった。小アジアでは、囚人や収穫の守護聖人であったものが、ヨーロッパでは、十二世紀頃から子どもたちの守護聖人として信奉されるようになっていく。良く知られている聖ニコラス伝承に、肉屋に殺され塩漬けにされた三人の幼児を、七年後に生き返らせるという話がある。この話は、男子のイニシエーションと結びつけて解釈することもできようが、聖ニコラスにまつわる不気味な伝承は、他にも「ゆでられた子ども」、「燃された子ども」等、多数あり、そこに一貫してみられるのは、人々の残忍な行為が神にとがめられないようにと、奇蹟を行なう聖者の姿である。

この奇蹟劇の聖なる飾りたてを取り払えば、残るのは子どもの供儀ではなかったか。古代ローマでは、クリスマス時期に、サトゥルヌスという農耕神の祭りがおこなわれていた。この神に捧げられたのも、幼児たちである。伝承のさし絵に描かれた聖ニコラスは、時に子どもを入れた小桶をかついでいる。彼が、良い子に贈り物を

して歩くと信じられるようになったのは、十六世紀頃からで、贈り物は、豊饒を約する木の実や果物であった。その代償に、彼は悪い子どもを桶に入れて連れ去ってしまふのである。

演じられた聖劇

著者は、レヴィロストロースの論を引用して、サンタクロースを分析している。レヴィロストロースによれば、サンタクロースは現代のトリックスターである。サンタクロースは、幼児とそれより年上の者という二つのグループ間の「取り引き」に介在する。二つのグループの背後には、生と死あるいは、秩序と非秩序の対立がある。幼児は、死者の側を代行し、クリスマスという飽食と非秩序の一時期の主役に祭りあげられる。クリスマスが終わるや、秩序は速かに回復され、死者は生者に鎮圧されて、生者の支配がむこう一年確約されるのである。子どもたちに与えられる贈りものは、力の交替劇をみごと演じた報酬であり、サンタクロースは、劇の進行に不

可欠な狂言回しということになる。

ところが、これは教会側には看過できない事実である。救世主の誕生を祝う夜に、それ以上の主役があつてはならない。サンタクロースは、今や聖夜を乱す偶像として、フランスでは教会から追撃されつつある。

本書のおもしろさは、伝承を集成しつつ、その本質に迫ろうとしていることである。キリスト教の聖者とされるサンタクロースも、ベールをはぎ取っていくと、意外な相貌を現わしてくる。その驚きに、豊かなイメージを添えてくれるのが、挿入されている多くの図版である。フランスの民俗に関しては、まだ日本にほとんど紹介がないが、中世から近世にかけての庶民生活の一端がうかがえる、興味深い一冊といえよう。

(雨宮裕子)